

【書評・紹介】

根村直美編著『ジェンダーと交差する健康／身体——健康とジェンダーⅢ』

(東京, 明石書店, 2005年2月, 238頁, 2800円+税)

林 美 枝 子

「ジェンダー」という概念に関して本書の編著者根村は以下の3つの概念のどれか、あるいはそれらが組み合わされた概念であるとしている。すなわち、①社会的に構築された、非対称な関係にある男性や女性という集団的カテゴリー、②①に関する知やそれに基づいた社会編成、③性別に関する知を①②に関する知、性別に関する秩序を①②に基づく社会編成と見なし、それらの改編を目指す視点のことである。

本書の目的は、こうして説明されたジェンダーの視点(ジェンダー・パースペクティブ)で、異なる専門分野・領域の者が、主に「健康」、「セクシュアリティ」、「身体」に関わる学問的、政治的、日常的な知を捉え直し組み換えていこうとする試みである。日常的知とは反省的に捉え直され理論化されることのない知を意味し、日常的知が自覚化されたものが政治的知、日常的知が自覚的に反省され理論化されたものが学問的知とされる。4部構成の本書では、Ⅰで学問的知、Ⅱで政治的知、Ⅲ、Ⅳで日常的な知への取り組みがそれぞれの研究者の研究課題のもとで考察されている。

Ⅰでは看護を扱った朝倉の論文が、例えばケア／ケアリング理論と女性性が結びつけられることがもたらす問題を考察し、看護の女性の職業としての確立は近代の所産であることを明らかにしている。根村の論文では論理学におけるジェンダー・パースペクティブが総説され、「健康」や「セクシュアリティ」に関わる自己の論理的考察におけるより精緻な「性別秩序改編のジェンダー・パースペクティブ」の考察が行われる。

Ⅱでは政治的知として、「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ」の概念を二人の学者が考察する。澤田は戦後沖縄というローカルな文脈でいかにこの概念が助産婦の活動を通じて芽生えてきたのかを報告している。兵藤は近年における国際的な文脈でのこの概念を取り巻く状況とバックラッシュ、NGOの対抗戦略の現状を報告し、これをジェンダー秩序の解体、再編・再強化の流れであるとしている。

Ⅲにおいて文化人類学者の田口は現代日本社会の月経／生理に関するジェンダー規範を明らかにするが、そこで実際に語られる月経コードにはその規範や男女の非対称性を矮小化させていくような場となりうる可能性があることを示唆している。また藤田は男性の青年期の身体を可視化する試みを通し、これまで言われてきたように女性のみではなく男性も、その身体像がジェンダーにいかに関わり取られたものであるかを明らかにしている。

Ⅳにおいて村田は「規範からの超越の美化」という価値観を述べ、具体的には喫煙が不健康であっても「男らしさ」を再確認、強化するものとして表象されている側面からもその喫煙行為を考察する必要性を指摘している。また田中は男性の「働き過ぎ」を成立させているものは強固に根付いている「家族を養い守る」という男らしさであることを分析し、私的空間に男性がとどまることがジェンダー秩序に反することになるがゆえに男性には家庭や地域の領域に居場所がないことを明らかにしていく。しかし「男女の相互乗り入れが、意識を変えることによって可能になるという認識枠組み自体を問い直していく必要がある」と述べ、そのためにも具体的な男女の「相互乗り入れの場面で〈男らしさ〉がいかにして定義されているのかを問い

続けていくこと」の必要性を述べている。

本書の重要な視点は、性別及び性別秩序の中核に「社会構築性」をおくことである。根村は対象を社会的に構築されたものと捉えることの意味を、「記号と対象もしくは対象のあつまりとの間にただ一つの確定した対応があることをわれわれが知りうるという考えを斥けた」ヒラリー・パトナムの「内的实在論」を紹介しつつ説明している。「内的实在論」において「真理」は固定したものではなく、変化しうるものとされ、対象は相対的に捉えられることになる。よって、本書の立場は、考察を試みた対象である知の真理も、コンテキストによって変化しうるものであり、現在われわれが正当化している手続きも、別のよりよい手続きへの可変性を受け入れるものとなる。

少なくとも、本書における常に対象を相対的視点で現在というコンテキストの中で捉えようとする試みは、文化人類学が対象である文化を理解するときの手法そのものである。しかし、知のただ中にいる者がその知の再構築にあたり、「個々人にとってよりよいものとするをを目指すような見地に自らをおくものと言える」のかは、必ずしもこれらの論文からは理解することができなかった。何が個々人にとってよりよいものなのか、きわめて曖昧でまさにコンテキストの有り様に依存するものだからである。よしとされた目指す方向性が必ずしも新たな政治的背景によるものではないとどう判断するのであろうか。

「セックス」あるいは「女性」「男性」という知のカテゴリーを相対的に捉え、その可変性を受け入れることには、もちろん同意するが、個々人にとってのよりよい知の模索が、社会にとってのよりよい知の再構築へと叶う道程が筆者らの今後の研究でより具体的に示されていくことを期待したい。

文化人類学が動物でしかないヒトが文化によって人間となり、人間とは何かの答えを、文化を研究することで明らかにしようとしている学問であるなら、文化人類学が対象とする性は文化的構築物としての性であるジェンダーでしかない。しかし、社会文化的性差といったジェンダーの1980年代以降使用されてきた一般的説明から、近年は本書のように「文化」が抜け落ちる傾向が伺える。2005年末の男女共同参画社会基本計画の改正においても、原案では「社会的・文化的性別（ジェンダー）の視点を定着させる広報・啓発活動を展開」となっていた文言は、結果的に「社会的性別（ジェンダー）の視点の定義について誤解の解消に努め、恣意的運用・解釈が行われないよう、広報・啓発活動を進める」へと修正された。

文化人類学は、文化は固有で唯一無二のものであり、評価の対象とはならないとして、他文化への文化的干渉を忌避する立場の学問とも言える。しかし多くの民族社会における文化変容の現実を観察し記録してきたのも文化人類学である。ジェンダー・パースペクティブの実現を可塑的に探求すること、男女の役割や空間の相互乗り入れにおける経験や知の多様性を、意味を去勢することなく記録する力を文化人類学は有している。本書は文化人類学の専門書ではないが、ジェンダー研究での学問的探求から文化人類学がはぐれないようにする手だてを、改めて確認することのできる一冊である。

(はやし・みえこ／札幌国際大学)